

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価（3月24日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の課題解決能力と主体的に学習に取り組む態度を育成するため、継続した授業改善に組織的に取り組む。 ②生徒会執行部が中心となり、生徒主体で行事等を企画・運営する力を育み、学校行事・部活動等を活性化させる。	①3年間の「指定校事業」のまとめとして、これまでの研究成果を踏まえ、主体的・対話的な深い学びにつなげる。 ②学校行事や部活動等において、生徒が企画・運営する力を育成するため、協働する力を重視し、生徒が主体的、自立的に活動できるように促す。	①研究授業や授業研究協議会を通じて、生徒が主体的に学び、深い学びに至る手法を実践する。 ②学校行事の準備から運営まで、生徒会執行部や各委員会を中心として、生徒が主体的に活動する機会を増やし、生徒同士の協働による企画・運営ができるように支援する。	①組織として授業改善に取り組み、課題解決に向けた具体的な方策を教科を超えて共有することができたか。 ②生徒が自ら考え行動し、行事の企画や運営を主体的に行い、協働することができたか。	①授業力向上指定校のまとめとして、研修会や発表会を通じて、生徒が主体的に考え、深い学びができるような授業改善を行ない、他校との情報共有も充実して行うことができた。 ②体育祭や文化祭、球技大会等において、生徒が自ら企画運営することを目標として実施することができた。生徒会執行部や各実行委員を中心に、生徒が積極的に意見を出し、実現できるように支援することができた。	①主体的な授業のアイディアは豊富に出てくるようになったが、指導と評価の一体化については、いまだに検討を要することが多い。 ②生徒が企画した内容を実現するために、他グループとの連携をさらにすすめる。また、生徒主体で実施する方針と支援の方向性を職員全体に事前に周知することも必要である。	①義務教育と高校では対応が異なる面もある。義務教育では登校していても在宅でも学習の支援を実施するように考えているが、高校では学校へ行かないと卒業や単位に直接影響がある点が義務教育と違う面である。 ②不登校生徒への対応は、生徒にかける時間の削減（教員の働き方改革も関係している）により、生徒の世話を焼く時間や行事の削減も昨今は見られるようだ。	①主体的な授業への取組について意識づけはできたが、個々の教員のノウハウに依存することが多く、より組織的に主体的な授業を組み立てていく必要がある。 ②文化祭で新しい全校企画を実施するとともに、各クラスの内容を事前に選考し、昨年度の課題であった企画内容の偏りを改善することができた。体育祭や球技大会では、より生徒を主体とした企画運営を実施することができた。	①授業の内容と評価方法をできるだけ分かりやすくリンクさせることにより、どのような手法の授業でもより正確に評価に繋げ、様々な授業のアイディアが無駄にならないようにする。 ②生徒の企画した内容の職員への周知が遅れることがあったため、全職員への周知徹底と協力体制の依頼を次年度はさらに充実させたい。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①生徒の実情を踏まえて、社会の変化に対応しながら、生徒が自ら考え、自ら行動できるように指導・支援していく。 ②SCやSSWと連携し、外部機関と適切に連携しながら、教育相談コーディネーターを中心とした生徒支援体制を充実させていく。	①生徒自身が、所属する組織の一員としての自覚を持ち、気付きを得て、将来を見据えながら主体的に行動できるように、助言・指導の充実を図る。 ②困難を抱える生徒を早期に把握し、組織的な行動により適切な支援につなぐために、SCやSSW、教育相談コーディネーターとの連携を密にする。	①初動対応に誤りがないように職員間での情報共有を図り、グループや学年等で組織的な支援を行う。 ②SCやSSW、教育相談コーディネーター間の連携を密にして、校内コーディネーター会議を定期的に行い、情報共有を行うとともに経験年数の浅い教員の人材育成を図る。	①生徒の実情に応じた、組織的に統一した指導をすることができたか。 ②定期的に校内コーディネーター会議を開催し、校内関係者間で情報共有を図ることができたか。 ②SCやSSWなどと連携し、積極的かつ組織的な相談・支援に取り組むことができたか	①生徒の実情に応じた手厚い指導を、組織的に実施することができた。 ②SCやSSWと連携し、組織的な相談支援に取り組むことができた。また、学年や進路担当と協働し生徒を組織的に支援することができた。	①前年度より組織的に対応することができているが、初動の段階で、大事を小事に、小事を無事に収めることができるかが大切である。この点に教員間の意識の統一を図りたい。 ②SCやSSWと担当教員の連携は充実していたが、担任との連携に課題が残る。報告、連絡、相談の時間や機会をうまく作れるように工夫したい。	①不登校の生徒への対応には難しい問題があると思うが、手が回らない、時間が足りないこともあるのではないかと。 ②退学や転学した生徒の後追いはいしているのか。	①問題行動が発生した際、学年全体で対応することができた。しかし、窓口となる教員の負担が多くなっていることもあったので、考慮する必要がある。 ②教育相談ではSSWとも連携し外部機関と歩調を合わせることができた。また、昨年度より教員間の連携がよく取れていた。	①5年以内の若手教員については定期的に会議を実施し、生活事案についての指導・教育を実施していきたい。 ②教育相談について、学年や教科担当等、関係職員との情報共有を図り、組織として行動できるよう努めたい。 ②生徒状況について保護者との連携を深め、医療機関に繋げることの有効性を伝えていきたい。
3	進路指導・支援	○生徒が自らのキャリアについて目標を持てるよう促し、一人ひとりが望む進路希望を実現できるよう、進路指導体制、教育相談体制、学習支援体制のより一層の充実を図る。	○生徒が主体的に考え自己実現していく力を育成できるよう、進路支援体制の充実を図る。	○進路ガイダンスや保護者説明会等を各学年の適切な時期に実施し、学年と連携しながら進路実現に向けた支援を行う。 ○進路相談室の機能を充実させ、進路関連情報の周知を効果的に行う。	○適切な時期に、学年に応じた効果的なガイダンスや説明会等を実施することができたか。 ○進路相談室の利用状況を把握し、生徒に的確な進路関連情報を周知することができたか。 ○模擬試験の診断指標を参考にして、進路実現	○分野別模擬講義を実施し、1，2年生の早期から目標設定を行えるよう工夫した。また、2，3年生の保護者に対して進路説明会を行った。「仕事の学び場」「保育体験」への参加を促した。	○入学から卒業までの3年間を見通し、生徒及び保護者に対する進路指導・支援の計画を立ててゆく。 ○進路関係資料の収集と整備について在校生の意欲をより高めることがで	○不登校生徒ももちろんだが、頑張っている生徒や勉強などで悩んでいる生徒にも手を差し伸べてほしい。	○指定校一覧、進路の手引き等をデジタル化した。 ○本年度卒業生を招き、卒業生講話を実施した。 ○大学入試問題集(赤本)の貸し出し希望も多かったが、下級生にもよ	○ガイダンス、説明会におけるICT機器の効果的な活用を推進していく。 ○進路相談室の学習環境の整備を継続し、より利用しやすい環境を作る。デジタ

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価（3月24日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
				○模擬試験を活用し、振り返りを丁寧に行うことによって、学習到達度の向上を目指す。	に向けて取り組む力を育むことができたか。	○進路相談室の利用については、3年生は活発であったが2年生の利用は少なかった。 ○3年生には、進路先の研究、志願理由書の書き方講座、模擬面接などを実施した。また、業者模試の日程について再検討した。	きるように継続的に検討する必要がある。 ○計画的な進路活動が行えるよう、キャリア教育の内容を精査していく。また、生徒が希望する受験形態に照準を合わせた指導計画を検討し、業者模試の実施時期や回数を見直す。		り利用しやすい運用方法を継続検討する必要がある。 ○LHRにおいて、各学年の年間指導計画に沿って適切な進路指導を行う必要がある。学年間と情報を共有し、成果を検証する。	ル化により、迅速な情報開示を進めていく。 ○入学から卒業までの3年間を見とおし、生徒及び保護者に対する進路指導・支援の計画を刷新していく。キャリアパスポートの有効活用について検討する。
4	地域等との協働	○地域貢献活動や近隣の学校との協働活動を充実させ、地域とともにある学校づくりを推進する。	○活動内容の振返りを実施しながら、近隣の学校との協働活動をさらに充実させる。	○間門小学校と連携しているあいさつタイム、見守り活動、防犯教育などを継続して実施する。 ○横浜インターナショナルスクールとの新規の活動について検討する。	○活動を通じて生徒の自主性や自己有用感を高めることができたか。 ○地域の一員である意識・自覚を高めることができたか。	○各学年で地域清掃を実施した。また、生徒会執行部が間門小のボランティアに参加し、ソングリーダー部は引続きチアリーダーディングを教えに行くなど、近隣学校との連携した活動を実施することができた。	○他の部活動も積極的に他校との連携を図っていききたい。また、横浜インターナショナルスクールとの連携は計画を実行することができなかった。	○間門小学校でのアイサツ運動や見守り活動は、お互いに児童・生徒の成長を確かめられる、よい機会である。	○例年実施している地域清掃、あいさつ運動や見守り活動など学校全体で地域と協働する機会をもてた。ソングリーダー部は、11月から間門小学校に月2回チアリーダーディングの指導に行き、3月に発表を行うなど、近隣学校との連携も継続して実施することができた。	○一定の生徒が近隣学校と継続して交流することができているので、他の部活動や生徒会執行部で、さらに交流を深めていきたい。また地域清掃以外にも、学校全体で地域に貢献できる活動がないか考えたい。
5	学校管理 学校運営	①安全・安心で快適な学習環境の整備に向けた取組みを継続して推進するとともに、不祥事防止の取組みを通じて保護者や県民から信頼される学校づくりを確立する。 ②学校の教育活動に関する情報発信を積極的に行い、学校への理解が深まるよう努める。 ③教育活動に関する情報発信について、年間計画に基づく戦略的な広報計画を作成し、説明会等の行事を企画・実施することにより、中学生、保護者の学校理解が深まるようにする。	①校内美化及び衛生管理を徹底する。 ①不測の事態に備え、防災体制の充実を図る。 ①PTAと協力し、PTA活動の充実を図る。 ②戦略的な広報活動を推進し、学校ホームページや学校説明会の充実を図る。 ③人材育成を最重要課題として、仕事の分散化による負担軽減、量的緩和を図る。	①清掃用品の整備を定期的に行い、毎日の清掃活動をとおして校内美化の徹底を継続する。 ①具体的な場面を想定した防災マニュアルを改訂するとともに、避難訓練やDIG研修会等、生徒が主体的に取り組むことができる防災教育を行う。 ②生徒が活躍する説明会を企画し、本校の魅力を積極的に発信する。 ③「総合的な探究の時間」を軸に、職員が自ら課題の解決に取り組み、学校の意思決定に際して発言できる機会をつくり、学校全体の活性化を図る。	①清掃活動等、校内美化の徹底に取り組むことができたか。 ①生徒が主体的に取り組むことができる防災教育を実施することができたか。 ②効果的にホームページ等を更新するとともに、説明会等の参加者に対して、充分に本校の魅力を伝えることができたか。 ③自ら仕事の量的負担をコントロールし、組織として、やりがいを持つて業務にあたることができたか。	①毎日の清掃活動を円滑に行うため清掃用品の整備を行った。 ①防災マニュアルを更新するとともに、防災教室・避難訓練と保健の授業内でDIG研修を実施した。 ②学校ホームページの更新ルールについて検討を続け、迅速な更新のために必要な素材の収集、作成法について検討した。 ②学校説明会で校内見学希望者に、新たに生徒による案内説明を行った。外部説明会では、新たに部活動のスライドショーや動画を活用した。 ③「総合的な探究の時間」は3年間のプログラムの整い、生徒の作文が各賞を受賞するなど成果を上げた。職員が学校の意思決定に関わることにより、学校全体の活性化が進んだ。	①一人一台端末を利用したより主体的に生徒が取り組める防災学習の方法を模索したい。 ②迅速なホームページ更新のために根本的な見直し・検討が必要である。 ②オープンキャンパス・部活動体験・学校説明会等は、現在の形体を踏襲しながら、発展させる。 ③「総合的な探究の時間」の3年間のプログラムができたとはいえ、時間がたち、人が変わっていくなかで、易きに流れることなく、常に進化を求める姿勢が必要である。	①DIG研修をどのように実施しているのか。 ①小学校で避難場所について再検討しているが、横浜立野高校が緊急避難場所になる可能性があり、協力いただければ幸いである。	①毎日の清掃活動やそのための整備をとおして、校内美化に努めることができた。 ①今年度は教科内でDIG研修会を試行的に実施した。 ②ホームページ更新はできる範囲で取り組んできたが、基本的なデザインや更新ルールの検討が必要である。 ②現状のオープンキャンパス・部活動体験・学校説明会等は定着した。 ③生徒・職員共に、探究チームが求めている課題の趣旨を徹底し、課題解決や成果物の完成度を高めていかなければならない。	①保健の指導内容に適しているもので、今年度のDIG研修会の実施方法を次年度以降につなげたい。 ①地域との連携を含めて、より実践的な防災対策に取り組んでいきたい。 ②CMSを活用した更新について素材の収集と更新ルールの再検討を行う。 ②全公立展・公私合同説明会等の広報活動で活用するための動画作成を行う。 ③「総合的な探究の時間」の発表会などに積極的に生徒を参加させ、生徒の経験値を高め、可能性を広げることが大切である。